

『優くんのネクタイ』

岡崎ゆか

川の向こうのビル群を眺めながら、みどりは目をこすった。夫の運転する車に乗って、もう三十分ほどになる。目的地のグラウンドまでは、まだ二時間ある。

はじめの予定なら、この時間はまだ朝食を食べているはずだった。

「またそっちで優の遠征の試合があるよ。久しぶりに会えるといいな。」

一週間前に由美からメッセージを受け取った。添付されたスケジュールによると、優くんは前日に宿舎に泊り、由美たちとは別行動である。では現地集合で、ということになり、『優くん十時半試合開始』とみどりはスマホのカレンダーに入力した。

そして昨夜、由美から追加の連絡がきた。ネクタイのことで、という。

「優が制服のネクタイをうまくつけられなくてね。それを隆司さんにつけてもらいたいんだけど。お母さんにつけてもらうのは、もう恥ずかしいんだって」

最後に、泣き笑いの絵文字がついていた。

「ネクタイ、結ぶの得意だっけ」

テレビから目を離さずに、夫は飲んでいたビールの缶を少し持ち上げて、「下手」と言った。

どうしたらいいだろう、と考えている間に、またメッセージが届いた。

「大丈夫、ネクタイはね、もうできてるのをカチツとつけるだけになってるから」

——そんなに簡単？

みどりは「お安い御用」と返事をして画面を閉じた。スケジュールを見ると、試合開始の一時間前に「更衣」とあった。ここにいてほしいというわけか。

由美は、普段から優くんに合わせて朝が早い。遠征の明日も早朝からいっしょに動くのだろう。それにさっき「お安い御用」と伝えてしまった。一時間出発が早まるくらいで済むわけにはいかない。

「もう結んであるやつを、カチツと留めるだけなんだって。予定より早く行くことになるけど、いい？」

「子どもが困ってるなら、行くやろ」

出発の時間は一時間早まった。

みどりと夫は子どもたちより少し早くグラウンドに着いた。グラウンドには関係者の大人以外誰もいなかった。おそらく保護者と思われる。話しかけられたらどう説明すればいいのだろう。

グラウンドの奥に目をやると、責任者のようなスーツの男性がいた。もくもくとあご髭を生やしたその男はこちらにゆっくりと歩いてきた。男との距離があと少しとなったところで、グラウンド入り口から子どもたちが入ってくるのが見えた。前の試合の後に宿舎に泊まり、コーチに連れられ電車でやってきたのだ。

みどりは列に向かって「私は関係者です!」の意味を込め、大袈裟に手を振った。子どもが集団でしかなかった列から優くんが浮かび上がってきた。今度はそこへ目掛けて手を振った。目が合うと優くんは、あ、どうも、という大人っぽい会釈をした。

優くんは生まれた時から知っている。小学校に上がる前までは毎週のように会っていた。家が遠く離れ、今では年に一度会えるかどうかだ。定期的にもらう写真によって優くんのイメージが更新されるかというそう簡単にはいかない。遊んでいたころの姿にいつの間にかもどっている。みどりの頭の中で、優くんは小さな三輪車に乗っている。みどりの息子に手を引かれてスキップしている。

去年も今年もみどりは驚いた。実際の優くんは予想をはるかに超えて成長していた。もう立派に大きな子どもなのだ。首元を見ると、そこにはネクタイがちゃんとついていた。

夫はビデオをかまえ、子どもたちを追ってベンチ席までついていく。撮影をいったん終えた夫は顔をあげ、こちらを見た。目を大きくひらいて合図すると、小さく彼はうなずいた。

ベンチに荷物を置いた優くんは、ネクタイをいとも簡単に取って、すばやくユニフォームに着替え始めた。みどりは視線をベンチ席からグラウンドを囲む緑へと移し、それらを眺めて待つことにした。

しばらくして入り口からにぎやかな声がした。大きめの荷物をもった女性たちが入ってくる場所だった。保護者の集団だろう。その中のひとりが大きくこちらへ手を振った。由美だった。笑顔でこちらへ歩いてきた。みどりは「ネクタイしてたよ」という代わりに「遅いよ!」とおどけて声をかけた。それが聞こえなかったのか、由美は「寒いね」「電車が遅れてさ」と言い、キラキラした目をこちらに向けた。そして忙しくみどりのうし

ろに視線をやると「ちょっと見てくるね」と子どもたちが着替えをしているところへ駆けていった。

ポケットの中の携帯がブルッと震えた。留守番をしている息子が今起きたらしい。焦げたベーコンエッグと一緒に自慢げにピースしている写真送られてきていた。「作ったの?!すごい」と返事を送ったあとで、三十分前に由美から連絡がきていたことに気づいた。駅での優くんの写真のあとに「ネクタイしてた!」と添えられていた。

試合前のアップの間に、由美は近くにいたママ友のひとりにみどりを紹介した。

「ほらね、去年も来てたでしょう。高校の友達。関係者、ね。もう家族同然よね!」

由美とママ友が、がははと笑う。みどりもつられて笑いながら、自分だけに聞こえる声で「家族なわけないけどね」と歯の隙間からこぼした。

由美たちにとっての現在進行形の言葉は、みどりには、すでに過ぎ去った時間の響きがあった。

「あのネクタイ、何やったんやろね」

帰りの車の中でみどりが言うのと、待ってましたという顔で夫は続けた。

「俺、優くんと一回も目、合ってないんやけど」

二人で、少し笑った。

「昼ごはん、なんかおいしいもの買って帰ろう」「そうやね」

川沿いのビル群を行きとは反対側に見ながら、みどりはさきほどの試合の様子を頭の中で振り返る。優くんは好奇心旺盛なまま大きくなった。すべてのことに全身全霊で取り組む。由美は「この歳でつきあうのたいへん」といつもこぼしているが、結局のところ、優くんは由美に似たのだろう。

今年も優くんの雄姿をたくさん写真に収めた。ほかの子も数枚ずつ撮ってある。オレンジの靴の子も、小柄で幼い顔をした子も、お母さんの声が大きかった子も、みんな頑張っていた。キャプテンも……、キャプテンは誰だった?

試合は惨敗だった。そういえば去年もそうだった。もしかしたら去年の動画や画像を子どもたちは見たくなかったのではないだろうか。

それでも帰ったら、今年もまた編集して渡すつもりだ。そして来年も私たちは試合を見に行くのだろう、とみどりは思う。

車の窓を開ける。ひんやりとして、どこか清々しい空気がすうつと胸に入ってきた。